

第十一次自治制度研究会 第8回研究会概要

- 1 日 時 平成27年7月8日(水) 18:00～
- 2 場 所 都道府県会館 4階 407会議室
- 3 テーマ 文化芸術を活用した地域振興
- 4 講師 富山県知事 石井隆一
- 5 報告概要

1. はじめに

・この3月14日には北陸新幹線が開業しました。富山県民は新幹線開業まで約半世紀の間待ちました。現在、開業して3カ月が経ちましたが、乗車人員が開業前の同時期に比べると3.3倍になりました。4月、5月で見ると富山県内では、宇奈月温泉の宿泊者が、対前年度比46%増となりました。高岡市の国宝瑞龍寺の参拝者は、7割増になりました。

・東京－富山間の所要時間が最短で2時間8分になりました。輸送能力についても臨時便も含めれば、従来の北陸本線が満席で約600万席であったのに対し、その3倍強の約1900万席超になりました。

・問題は、これを一過性にせず、しっかり持続させて、次の発展にどのようにつなげていくかということでもあります。特に、地方創生を中央政治の重要テーマにしてもらいましたので、この新幹線開業と地方創生という2つのフォローを風にしなげながら、しっかり富山県の新しい未来を築きたいと思っています。その際には、芸術文化も大事に生かしてやっていこうと思っています。

2. 文化芸術の振興と魅力的なまちづくり

・富山県民の県民性は、文化芸術の振興に大変熱心であるということです。また、人口108万人の富山県にあって、公立の美術館・博物館は、市町村分も入れて35館あります。人口100万人当たり32.2館で、全国3番目に多い県であります。それから、客席300席以上の文化ホールにあっては、31館あります。これは人口当たりになりますと全国1位であります。

・県民がどの程度芸術文化に親しんでいるかを測るには、いろいろな定義がありますが、社会生活基本調査で見ますと、芸術文化・美術鑑賞4位、邦楽2位、書道3位になっています。また、1世帯当たりの新聞発行部数は1.07部で全国1位であります。

・富山県民に対する文化振興に関する意識調査の結果を見ていただくと、「子供たちが文化に親しむ機会の充実」を選択された方が一番多く、44.5%を占めております。次が「伝統芸能・文化財の保存・継承・活用」、「県民が文化を鑑賞する機会の充実」になっています。「文化施設の整備・充実」も25%で、比較的に高いのですが、施設の数がそれなりにありますので、このぐらいの割合になっていると思います。次が「文化を生かした中心市街地のにぎわいの創出」

で25%となっています。

・「質の高い芸術文化の創造のための拠点の整備・充実」で18.6%、「文化の国際交流や地域間交流の促進」が15%と続いています。特に舞台芸術中心の文化振興という意味では、必ずしも県民がこぞって、利賀の舞台芸術の振興をどんどん進めてほしいという感じはなく、優先順位はさほど高いとも言えないのかもしれませんが、そこがある意味では悩みでもあります。

・芸術文化の振興というときは、まず、文化活動への幅広い県民の参加を求めていくため、参加機会の提供を行おうとします。公立文化ホールでの共同公演や一流の音楽家をお招きしての小学校での出前コンサート等であります。今年はちょうどいろいろな節目の年でもあったので、新幹線開業に備え、50周年記念の県民会館をリニューアルオープンする等、いろいろな取り組みを行っております。

・先ほどの世論調査の結果を見てみても、質の高い文化の創造と世界への発信は、非常に高いというわけではありませんが、やはり今のままでは物足りなくて、進めてくれという人もそれなりにいます。比率は少ないのですが、熱心な方々が多いのです。

・富山県には文学館がなかったので、知事公館を思い切って廃止・改修、一部増築して、「高志の国文学館」を開館しました。富山県にゆかりのある大伴家持は、1300年ほど前に誕生しました。万葉集の編纂者と言われています。天平18年、西暦746年に富山県に国司として5年間赴任していました。家持が富山県、越中で詠った歌が223首あり、万葉集の中に残っています。そのようなこともあり、我々は大伴家持をすごく大事にしております。

・また、利賀芸術公園では、幸いに鈴木忠志さんという、舞台芸術の世界では大変有名な方に富山県で活躍していただいているので、そこを拠点とした国際芸術村構想を進めています。

・富山県近代美術館は開館して35年ほどたちますが、20世紀のピカソ、ポール・デルヴォー、ジャスパー・ジョーンズ等、地方の美術館としては驚くほどの名品がそろっています。やや敷居が高く、県民に親しまれているとは言い難いのですが、大分老朽化してきたこともあり、移転新築工事を実施しているところであります。

・そのほか、文化と他の分野の連携を図ろうということで、歴史と文化が薫るまちづくり事業という地域文化資源を活用した様々な市町村や民間の取り組みを支援するということにも力を入れております。

3. 演劇による村おこしと地方再生～南砺市利賀村～

・本題である南砺市利賀村における演劇による地域おこしと地方創生についてお話しします。

・富山県は能登半島と新潟県の間であり、南砺市はその西の石川県境寄りにあります。南砺市は、8つの町村が合併したことから、面積でいうと琵琶湖ぐらいであります。その中の利賀村は、五箇山の中でも最も奥まった、まさに秘境の中の秘境という場所にあります。

・平、上平中心に合掌造り集落は、岐阜側の白川郷とセットで世界遺産になっています。重要伝統的建造物群保存地区という指定は白川郷も五箇山も受けていますが、その上で、五箇山は史跡指定も受けています。それだけもとの姿をしっかり守り、なりわいも含めた伝統的な生活

スタイルが今まだ残っている場所でもあります。

- ・この南砺市のほかの地域には、観光名所として、井波の瑞泉寺などがあります。また、城端には、アニメの制作会社が来ています。東京よりもここでやりたいという、そういう新しい動きも出てきました。

- ・富山県利賀芸術公園については、私が知事に就任する数年前のことですが、12万4,000平方メートルある広大な土地をすべて県立公園として指定しています。

- ・最寄りの駅としては、富山市にあるJR越中八尾駅、あるいは東海北陸自動車道の五箇山インター等もあり、いろいろなところから来ることができますが、1時間程度もかかることから、秘境と言えれば秘境であります。

- ・ここ利賀芸術公園には、日本にはたいへん珍しいギリシャ風の野外劇場があります。

- ・世界的に著名な演出家の鈴木忠志さんは、当時、東京で制作した演劇により時代の寵児としてもてはやされていました。その時に、彼は突然、東京では真の芸術は育たないと考え、この利賀村にやって来られました。

- ・第1回の世界演劇祭「利賀フェスティバル」が開催されたときに、ちょうど鈴木忠志さんの盟友でもある建築家の磯崎新さんに野外劇場を設計していただきました。合掌造りを移築したり、そこにあったものを修築したりして、この地に合掌造りの劇場をつくりました。これが、外国人にはたいへん評価されています。欧米の方々は、格好の良いヨーロッパ風の文化ホールを見てもあまり感動しないようであります。自分たちのまねをしているという印象しかないのであります。この合掌造りの劇場での公演を観劇された方々は本当に感動されるそうです。ぜひこのような場所で演劇を観劇していただきたいものです。

- ・利賀芸術公園を象徴する代表的な建物としては、利賀スタジオがあります。カリフォルニア大学や富山県の経済界の方々が、鈴木忠志さんを応援するということで、寄付金をいただいて建設されたものであります。

- ・南砺市の中村体育館にあっては、元々は旧利賀村時代に建設された体育館であります。これを南砺市の方で一部改修を行い、利賀大山房という劇場として活用しています。1億数千万円の改修を行い、大劇場として活用されているということで、全国から視察に来ておられます。

- ・利賀芸術公園の創造交流館は、以前、富山県利賀少年自然の家でありました。交通事情も悪く、利用者も減少し、過疎化が進展する中で、思い切って舞台芸術の拠点として転用することにしました。

- ・県と南砺市でそれぞれが施設の改修を行うなど分担して行ってきましたが、南砺市は、合併しても旧過疎地域の特例があったこともあり、過疎債を活用した整備を行ってきています。過疎債は交付税措置が大変手厚い制度ではありますが、それでも3割は純粋に一般財源が必要となりますから、その半分を県が補助する仕組みなどを設けております。

- ・1973年ごろ、当時の利賀村では、「利賀村合掌文化村」で村おこしを行なおうと考えました。その後、1976年に鈴木忠志さんが、東京では本当の文化は育たない、可能性は地方にあると、全国を歩かれ、この利賀村を大変に気に入り、ここにかつての早稲田小劇場の本拠を置きます。

・初めのころは、少し文化的な摩擦などもあったように聞いています。そのうちに、鈴木忠志さんの芸術が本物だということを知っていただけるようになりました。鈴木忠志さんはあのころは、岩波文化ホールの芸術監督もされ、若手のホープで非常に著名な人でした。そのため、鈴木忠志さんが地方の過疎地に本拠を置いたということでマスコミからも大変注目され、著名な方々がサポートし、観劇にも来てくれました。

・このようなこともあって、利賀での取り組みがだんだん軌道に乗り、1982年に世界演劇祭利賀フェスティバルがスタートしました。以来毎年、夏を中心に世界演劇祭が開催されます。

・平成6年には、利賀芸術公園の地域一帯を県立化しました。

・1999年に、一旦利賀フェスティバルを閉幕しますが、2000年になって、新たなスタートを切ろうと、利賀サマー・アーツ・プログラムが始まります。そこから、単なる演劇祭だけではなく、日本の若手の演出家を育てようと、演出家コンクールが開催されます。大学生、中高生で舞台芸術を志す人を育てるプログラム、人材育成もスタートされます。

・それから、2001年にはBeSeTo演劇祭が開催されます。これは北京とソウルと東京の頭文字をとった演劇祭であり、持ち回り開催されていましたが、地方では初めて利賀で開催されました。

・2005年には、改めて夏の世界演劇祭利賀フェスティバルが復活します。このころから、次代を担う、舞台芸術の人材を本格的に養成していこうということで、スズキ・メソッド・トレーニング（「鈴木演劇塾」）が開催されるようになります。

・2006年には、「舞台芸術特区TOGA」を認定いただき、舞台における誘導灯の撤去が可能になりました。

・同じ2006年には、日露文化フォーラムを富山県で開催しました。プーチン大統領が初めて大統領に就任されたとき、ロシア側の催しに出席されていた鈴木忠志さんに文化の日口交流を是非にという依頼が対談の際にあったものです。

・2007年には、人事院の国家公務員の若手幹部の研修に利賀を使ってもらいました。鈴木忠志さんの舞台の稽古はものすごく厳しいことから、国家公務員もしゃんとするという場面もありました。

・2012年には、鈴木忠志さんが代表のTOGAアジア舞台芸術センター、現在のTOGAアジア・アーツ・センターが設立されます。鈴木忠志さんの他には、ギリシャ、インド、イタリア、アメリカ、ロシアなどの舞台芸術の代表と言える人たちが参加されています。これが東京ではなくて富山県の利賀にできるということが、まさに分権の理念だと我々は思っています。

・また、2000年には、公益財団法人舞台芸術財団演劇人会議を設立しました。この事務所を東京ではなく富山県の利賀に置くため手続きをしようとしたところ、地方につくるのはまともな財団ではないのではないかと言われました。日本は中央集権の国です。財団をつくるのに東京、大阪、名古屋、京都はともかく、富山県のまして利賀なんて信じられないという感じでした。

・最近では、利賀アジア芸術祭なども開催しており、今年は、SCOT（早稲田小劇場）ができてちょうど50周年ということもあり、にぎやかに開催されるのではないかと考えております。

・利賀フェスティバルは1980年から1999年の間に18回公演を行い、17万人の来場者がありました。当時の人口が1200~1300人でしたので、人口の約10倍の来場者という計算になります。その後、2000年から15年で約20万人がいらしていますので、33年間で37万人に来ていただいたということです。東京や神奈川等の人口の多いところで行えば、この10倍も20倍も来ると思います。このような過疎の地域でよくがんばっているのではないかと思います。

・以前からギリシャも含めて欧米やインドは、その国のトップまたはトップクラスの人がメンバーになり、参加していただいていた。最近では、中国の方々がすごく関心を持ち、ぜひ参加したいと言ってきています。ロシアも比較的最近興味を持たれたようです。鈴木忠志さんは欧米の芸術家が尊敬する人ですから、中国の人も、これはやっぱり世界で一流なのだと評価をしています。

・ロシアのモスクワ座は、ロシアでトップの芸術座です。そういう人たちが、以前から鈴木さんの教えを受けに利賀を訪れてきます。そこで「リア王」等のいろいろな作品を鈴木忠志さんの指導を受けて、自分たちで創造し、モスクワで公演を行い、高く評価されています。

・中国では上海戯劇学院等の芸術家の方も、すごく鈴木忠志さんを評価しています。鈴木忠志さん自身も上海・北京でも作品を公演しているし、彼の指導を受けた作品を中国で公演して非常に高い評価を受けておられます。

・次の時代を担う人材育成をしていかなければいけないということから、ここ利賀では演劇を通じていろいろな人材育成を行っています。大学生、高校生、中高生のワークショップや講習などは以前から行っていきますし、最近では、毎年、世界からたくさんの若手の演劇人が、鈴木忠志さんの教えを受けに利賀を訪れています。1~2カ月間稽古をし、何カ国の方々が一緒になって新しい演劇や芝居を創造しています。

・この方たちは、アメリカやヨーロッパから利賀に来る旅費と10万円程度の自己負担をしてみても、鈴木忠志さんに教えてもらうために利賀を訪れます。このように強制もされずに教えを乞いに来られるほどの芸術家は、日本には他にあまりいないのではないのでしょうか。

・今度の東京オリンピック・パラリンピックの文化プログラムで、この利賀で何かできることはないだろうかと提案しています。

・しかし、行政だけでは、このような活動に対してすべて支援できるものではありません。県内の民間企業の代表者に呼びかけ、「TOGAアジア・アーツ・センター支援委員会」を設立していただきました。富山県を代表するような企業が利賀での活動を応援しようという組織があります。

・今は、地方創生の時代ですから、南砺市にもがんばってもらい、TOGA国際芸術村を核としたクリエイティブビレッジ構想という構想を打ち出してもらいました。このような官民一体となったサポート体制で、いろいろな機会をつくってTOGAを盛り上げていこうと頑張っています。

4. 南砺市利賀村の課題と展望

- ・現在、日本では、少子高齢化による人口減少が進み、富山県でも、今の南砺市を入れて5つの市町が消滅可能性都市という指名を受けています。
- ・南砺市の五箇山地区を見ても、利賀と平地区では、65歳以上の人が既に40%を超えていて、上平でも35%、南砺市全体が31%、富山県全体は26%という状況になっています。
- ・この間にあっても、このような演劇活動は活発に行っていましたし、国際的な注目を受けていましたが、南砺市の人口は減っています。平成16年以前は2,000人近くの人口であったものが、平成16年で913人になっています。平成27年3月には589人にまで減少しています。
- ・五箇山の産業は、建設業、宿泊業・飲食、観光関係、製造業、卸・小売、医療・福祉、農業・林業です。観光施設の入込数はありますが、上平は、東海北陸自動車道ができて便利になったので、宿泊者は余りいません。いわゆる通過型の観光地となっています。
- ・このようなことから、南砺市では、「TOGA国際芸術村を核としたクリエイティブビレッジ構想」を打ち出し、交流人口の拡大による「滞在型観光地化」を目指そうと、様々な取り組みを行い、数値目標を設定したうえで、たいへん頑張っておられます。

5. むすびに

- ・富山県全体でも人口は減少し、高齢化も進んでおります。しかし、製造業・ものづくりの伝統があり、水が良質で安い、電力が安い、地震も少ない、という富山県のよさがあります。県民は働き者が多く、持ち家率・可処分所得が全国でトップクラスであり、最近では1人当たりの県民所得も全国6位であります。
- ・生活保護率は、この10年以上、全国で一番低くなっております。富山県には、いろいろな事情で貧困になっても、親戚やみんなが助けるといふ、よき微風があるからだと思います。
- ・災害、犯罪は非常に少なく、保育所入所率、高校生の就職率は全国トップクラスで、女性の有業率も全国4位、法政大学の幸福度ランキングでは全国第2位となっております。
- ・しかし、若い人たちに世論調査やアンケート調査をすると、富山県は住みよくていいところだか、少し華やかさ、にぎわいが足りないという声が多く聞かれます。
- ・3年前のアンケート調査を見ると、富山県は移住先として、47都道府県のうち29番目でした。しかし、この2年は連続トップテンに入るようになってきました。富山県も新幹線ができましたので、トップファイブに入りたいと今努力をしております。幸い、7、8年前は移住してくる人が200人ぐらいだったのですが、昨年は400人を超えるようになりました。将来、この倍ぐらいにはしたいと思っております。
- ・国も東京オリンピック・パラリンピック東京大会に向けて、文化プログラムを検討しているそうではありますが、この利賀村をうまくこの流れに乗せてもらいたいと思っております。また、あわせて地方創生という流れの中で、我々がなるべく主体性を持って、利賀村を日本だけじゃなくてアジア、あるいはもっと幅の広い舞台芸術の拠点にしていきたいと思っております。
- ・現在の利賀村の課題は、夏の一時期だけの交流人口の拡大だけでは、定住人口にうまくつな

がらないことであります。これだけ多くの人たちが自費で研修を受けに来られるような場所なので、文化だけではなく経済学等も含めた研修の場にしたいと考えております。欧米の芸術文化人から見ると、日本の芸術文化人は若干視野が狭いのではないかという説があります。芸術文化のスキルはもちろん、世の中を見る目があればもっとすばらしいものができるのではないかと考えております。

・そのためには、経済・社会等についても教える場をつくらなければいけません。5月から11月ぐらいまで通年で、そういう世界で、志を持った若い人がたくさん来れば、そこにまた雇用も生まれたりします。それがきっかけでここに定住する人がきっと現れるのではないのでしょうか。

・今でも中国の方から、空き家をぜひ買いたいという話をたくさんいただいています。しかし、本当にそれでいいのかということもあります。もちろん外国の方に来ていただくのもうれしいのですが、我々としては、もう少しバランスのとれた形で、国際的な舞台芸術の拠点であり、多くの多彩な人がそこに定住・半定住するという場所にしていきたいと思っています。

・首都圏から中京圏・関西圏に行っている人口流動は、年間1億1,000万あります。北陸3県には640万で、富山県には199万人です。これが今度の新幹線開業で、臨時便を入れなくて1,700万人、臨時便入れると1,800万人から1,900万人近い流動人口がおこる可能性が出てきました。

・私は、何とかこの1億1,000万の10%でも、北陸を通して関西に行ったり、あるいは北陸でゆっくりして首都圏に戻ったりという人が出てくると、実は、今の640万プラス1,100万で大体1,700万から1,800万近くになると考えています。富山県を含む北陸を挟んで、首都圏から新しい関西まで新たなゴールデン・ルートができる。そういうふうにしていきたいと思っています。

6 質疑応答

〈委員〉

利賀村は、地域おこしを演劇で行い、国際的に成功していることで、私も大変注目をしていました。

いつの時代でも文化は、王様・領主等権力を持った人がサポートしないと維持できないという部分はあります。県知事がみずからサポートされているというのは大変重要な要素だと思います。

これは利賀村だけではありませんが、地域おこしで成功しているという事例をとっても、人口減を食いとめた事例というのは余りありません。どうしても人口減等の大きな流れをとめられません。そこに効果のある政策・地域おこしは本当にあるのかということは、今回の地域創生の中で問われると思います。利賀村のこの事業をもう少し、定住、準定住につなげていくということが大事だとお伺いしましたが、まさにそうだろうと思います。

一方で、これだけ人口が減ってくると、このフェスティバル自体を維持する利賀村の状態も、なかなか厳しいのではないかと思います。佐渡に鼓童が移り定着して、地域と一緒にやっていきますが、人口が減っていくという状態は変わりません。なかなかそこに効果のある政策

というのではないと思っています。

全国で人口が減る中で、地方の各市町村全部の人口が減らないというのは、至難の業で、東京から移ってもらうしかないという話になりますが、その辺、何か秘策はあるのでしょうか。

〈講師〉

秘策というほどのことはなかなか難しいです。いずれにしても日本全体の人口減少が今後20年から30年は避けられないと思っています。しかし、減ってはいるけれども、若い人もそれなりに入ってきて、あと20年から30年辛抱すれば安定するというふうになれば、随分、地域に対する将来展望も違ってくるのではないかと思っています。

今、利賀での演劇も8月から9月という夏の限られた時期での公演となっています。鈴木忠志さんは、世界的にも著名で、世界中からいろんな出演依頼などもあり、それでは利賀村が地域として発展していきません。そこで、春から秋ぐらいまで半年等、舞台芸術の研修コースをつくってはどうかと思っています。今でも世界中から手弁当でそれなりの数の外国人が利賀に訓練に訪れていますので、それをもう少し間口を広げることができれば良いのではないかと思っています。

この演劇、舞台芸術で、そこへ研修に来る人、あるいは劇団員になって暮らす人が増えると、あわせてこういう文化、舞台芸術の拠点であることが一つセールスポイントになって、平、上平の世界文化遺産の合掌造り、あるいは、同じ南砺市平野部の絹織物等の地場産業、そこにアニメの制作会社に来る等のいろいろな要素とうまく連携して、もう少し定住人口が増えるような工夫をしなければいけないと思っています。

意外と都市部の若い人にアンケート調査をすると、4割ぐらいは地方への移住を検討してもいいと答えています。現実に最近、富山への移住者が増えているのを見ても、以前は熟年の方が多かったのですが、最近では、20代、30代ぐらいの方でも移住される方もおられます。

日本人の若い人たちの価値観が少し変わってきているのかもしれませんが。より高い所得をというよりも、子育て環境がよく、自然が豊かで、ゆとりある生活しながら、もっと自立した人生を歩みたい、設計したいという感じがあるのかもしれませんが。

演劇の拠点というのも一つですが、もっといろいろな魅力を地域に育てて、安定した雇用の場を、給料はさほど高くないけれども、そういう仕事ができるなら来たいと思われるような場をつくっていきたいと思います。

例えば、高岡のある銅器会社の社長にお伺いしたのですが、20代の人で、東京で働けば、もっと所得が増えるのではないかという人がいるそうです。そういう人は、給料は高くなくてもいいので、この会社に入って、こういう製品をつくってみたいと言って来るそうです。

これからの時代は、若い人が夢を持てる、こういうことをやってみたいという情熱を持てる場、同じ雇用の場でも、クリエイティブなものをつくる、何かそういうこと場ができると違ってくると思います。そういう意味では、さきほどの伝統工芸品を製作している人たちの作品がニューヨークで売れると、それは地元にとってすごい刺激になるし、私も行ってみようかということ

になります。

演劇だけでなく、他のものも含めたもっといろいろな要素を富山県内、特に幾つかの拠点に芽を育てて、ちゃんと実がなるように育てていかなければいけないと思っています。

〈委員〉

やはりまちづくりで成功したところは、必ず仕掛け人がいると思いました。この仕掛け人も、常識人ではなく、ちょっと一風変わっている人が、かなりのエネルギーを生み出すという話を聞いたことがあります。鈴木さんも、利賀村を見いだして、かなり以前から活動しているという意味では、変わった人に属する仕掛け人ではないかと思います。しかも芸術性があふれる方です。

そういう仕掛け人が生まれるかどうかというのは、多分に運に左右される面があります。どこの地域もそういう人が生まれるかというと、そうでもありません。なかなか難しい面があると思います。

やはり共通しているのは、何もないということです。何もないというのはハンディキャップだと思われがちですが、むしろそれをテコにしてまちおこしができるという、利賀村は、好例ではないかなという感じはしました。

定住人口、人口の話ですが、知事がおっしゃるのは、少しぜいたくではないかと思いました。つまり、定住人口をふやすというのは、どの地域もかなりハードルが高いと思います。ここは少なくとも交流人口がかなりあると聞きました。夏だけではなくて通年に近いような形で人を呼び戻すことができれば、もっとまちが活性化できるのではないかという感想を持ちました。

質問は、移住先のランクですが、29位だったものが、ここ2年間はベストテンにランクインしました。これは何か考えられる要因はあるのでしょうか。

〈講師〉

一つ言えることは、間違いなく北陸新幹線開業という要因があるということです。開業したのはこの3月ですが、その開業に向けてこの数年、東京はじめ首都圏で、富山県というのがこういう県であるというアピールを随分してきました。そのためで、知名度がかなり上がってきたという気はします。

民間の方、県庁側が東京の方とお話しした体験を聞くと、数年前ぐらいまでは、富山県というと、石川県の西ですか、新潟県とどっちが北ですか、そういう調子で聞かれることも多かったそうです。しかし最近では、むしろ、富山県の自然が、立山黒部等が雄大で美しいと言われるそうです。富山の出身だと言うと、魚がうまいところ、鮭がうまいところとか、そういうふうと言われるようになってきました。

知名度が上がってきています。そういう県、地域があるということが、まず意識に上がらなければ、移住先の選択肢にそもそもなりません。新幹線開業に向けて観光振興、企業誘致をもっと熱心にやるという、いろいろな努力をしてきたことが結果として知名度の向上になったり、

イメージアップになったりしていることもあります。

この利賀村、大伴家持生誕1300年記念事業、あるいは近代美術館の移転新築もそうですが、人があるところにお金をかけて旅をしたいと思うには、自然が豊かで美しいとか食べ物がおいしいという以外にも、何か文化的なものがあるということも大事なのではないでしょうか。そこに行けば何か文化的なもの、洗練度の高いものに出会える。あるいは、それを体現するような人物と交流できる、何かそういう要素があって、人は行ってみようかということになります。

私は、この利賀を舞台芸術の拠点にしていくことは、実は利賀村だけの問題ではなくて、富山県全体のイメージアップにつながると考えています。そういうことを大事にしている県なり地域なら、ちょっと行ってみようという、相当な動機づけになるのではないのでしょうか。そういう面でもこういう活動を応援したいと思っています。

〈委員〉

この間利賀村でお伺いしたのですが、南砺市五箇山で5軒くらい空き家が出て、募集をかけたところ、40倍の倍率になったそうです。せっくなので新たに空き家を倍の8軒位にして若い人たちに来てもらったということでした。

有効求人倍率だけではなくて、失業率も全国では低いほうから第3位でした。仕事は森林組合、福祉関係等かなりあって、移住した若い人たちがみんな職に就いているという話もありました。

私は若いころ、技能五輪の育成をしていたのですが、普通は高校の段階で職人にならないと技能というのはつかないのです。能作の職人は、みんな大学を卒業しているのです。こういうつくる技術というのは、少し年をとってからでもつくのですね。私は、現場を見て感心しました。

〈講師〉

高岡のある銅器会社では、大卒の職人が多くおられると伺っています。

利賀村への移住という話がありました。南砺市の強みでもあるのですが、合掌造り集落が世界遺産になって、あの趣に結構若い人を引きつける要素があるのです。確かに、ちょうど空き家が出てきたので募集しました。

月1万円で貸しますということにしたら、50件以上手が挙がったそうです。中を見ると、こういう人なら来てほしいという人が何人かおられたので、少し増やして来てもらったのではないのでしょうか。

富山県で一番新潟寄りに朝日町さゝ郷地区があります。ここは朝日町の中でも若干離れたところですが、そこにも非常に熱心な地域おこしのリーダーがいます。この朝日町は、人口1万数千人で、さゝ郷地区はさらに小さな地区ですが、そこに、スイス人、チェコ人が移住してきました。1人はストロベリー、いろいろな野菜をつくる等、農業をしています。もう1人は、今は何か建設業的なことをやっているようであります。

私も、どのような人たちかと思い、会いに行ってきました。みんながではないと思いますが、スイスの人やチェコの方は、所得を重要視しない人生観があります。自分は農業をとことんやってみたかったとおっしゃるのです。また、子どもがそういう自然の中でおおらかに育ってほしいと思っています。

そういう意味では、人間の価値観も多様化しています。地元の受け入れ体制をしっかりとすれば、結構来てくださる人はまだまだ多いのではないかという気がしてきました。

〈委員〉

これだけ富山県で文化ホールや美術館、博物館があり、ずっと全国でトップクラスで維持されているというのは、ここから黒字で回るような仕組みができていのでしょうか。なぜこのような高いポジションを維持できているのかを教えてくださいたいと思います。

今、文化・スポーツをアジアから発信するという目的の団体に参加しました。意見はたくさん出るのですが、なかなか前に進んでいきません。このスズキメソッドで、いろいろな人が来るようになり、回っている感じを見ていると、何が違うのかと思います。何が鍵なのでしょう。

〈講師〉

いろいろな文化施設をうまく回すするには、どのぐらいのお金をどのように使っているのか、相当使っているのかということだと思います。あるいは、独立採算でやっているとすれば、どういう工夫があるのかということだと思います。

県内の美術館、博物館、公共ホールは、建物をつくったときの資本費を回収しようという発想はそもそもないのです。あとは、音楽コンサート、演劇、美術の展覧会をして、フローとして、そこで入場料収入がどのぐらい入るかということがあります。しかし残念ながら、入場料収入でフローの経費を賄えるというところはほとんどないと思います。国立でも、ほとんど公的な支援が入っています。もちろん県立、市町村の建物もありますが、入場料収入とか何かで賄っているのは、寄附もありますが、3割ぐらいあるかどうかではないでしょうか。

そのため、県によっても多少違うとは思いますが、行政がお金を出しています。ありがたいのは、富山県の皆さんは、自分はなかなか仕事や何かに追われたり等の事情があつて、文化的なものを身につける時間はないけれども、次の時代を担う子どもにだけは、ちゃんとした音楽、あるいは絵を鑑賞する等、何か文化的なものに親しませてやりたいと考えてくださっていることです。これは世論調査をすると、富山県では県民の声として非常に高いのです。そこに税金をつぎ込んで応援しているということは、皆さんがある程度やむを得ないと思ってくださっているからこそ成り立っています。

アーティスト、芸術家もいろいろな人がいます。私の狭い見聞の範囲ですが、鈴木忠志さんクラスで、場合によっては家を提供するから一年中いてくれと言われる芸術家は、ほとんど他にはいないのではないのでしょうか。

鈴木忠志さんは、東京の岩波文化ホールから35歳で芸術監督を頼まれ、その世界で時代の寵児でした。東京にいればギャラも高いし楽しく暮らせるが、自分はダメになると、本当の、とことんの演劇ができないと思いから、東京から地方に行くという決断をされました。

鈴木忠志さんの場合は、どう考えても東京でどこかの劇団に属していればもっといい生活ができたはずです。鈴木さんと30人くらいの人が、最初は不審がられながらも活動されていたようです。厳しい稽古の中でできあがった舞台は、私の見聞した範囲では、全く他の舞台と異質のものを感ずります。訴える迫力、そこに演じている人の人間的なバックグラウンドを本当に感じさせます。

だから、スポーツの世界も、一流の方が指導した一流選手のプレイを皆がたくさんのお金を払って見に行くわけですから、そういうことになればいいと思います。

〈委員〉

鈴木さんのメソッドが生きているのは、東洋的な能のような、西洋の演劇を超えるような形を考えていることと、富山県では日本の原風景が見られるということにあると思います。

富山県は日本の原風景なのです。あの散居村。上下足分離の原則があり、入母屋と寄棟の日本の家屋が2つづつかり合って、日本の原風景を見ていることを感ずります。

〈講師〉

私も専門的なことはわかりませんが、鈴木忠志さんが今のスズキメソッドというのを編み出したのは、こういう小舞台で歌舞伎と能の伝統芸能の中から、鈴木忠志さんなりの神髓を引き出したことにあると思います。特に、自分も舞台芸術を志して、単にヨーロッパのまねみたいなことはしたくないという中で、日本の能、歌舞伎、狂言等のよさ、鈴木忠志さんの立場から見た神髓を引き出して、それを現代演劇で再生させたということではないでしょうか。訓練を見ても、それは大変厳しいけれども、理にかなっているのではないのでしょうか。

〈委員〉

知事の知識の幅と深さのある教養に基づくご説明をありがとうございました。

〈講師〉

どうもありがとうございました。